

巻頭言

幼児教育について今考えること

小川 博久

現状について思うこと

二十七年間、幼稚園教員養成にかかわりを
持つてきて、現職教員養成にも二十年はかか
わつてきたことになる。今年から児童学科に
所属し児童学の一部として幼児教育を教える

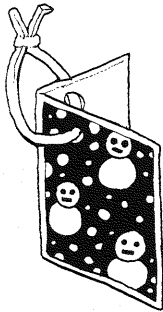
ことになった。少し解放された気持になつて
いる。常に日本の幼児教育の現状にいつもあ
る種の危機感と、それに対し何をなしようか
という問いをつきつけられていたように思
うからである。しかし自分がそうした現状に何
をなし得たかといった真剣ではあるが、不遜

な自問自答に対しては、自分の無力感を伴う内省しか返ってこなかったからである。

しかし以前、同業者である妻から、「あなたは日本の幼児教育をリードしているように錯覚しているかもしれないけれど（もちろんそんな思い込みはないと答えた。）あなたが関わっている幼児教育の実践は、多くの場合、比較的レベルの高いほんの一部に当たる実践でしょう。私のように短大の保育者養成にかかわる実習担当者として、どこにでもある平均的な実践をも相手にして、幼児教育のあるべき理論を短大で語りながら、その理論とかけ離れた現実の幼稚園や保育所を繰り返して巡回してみないと日本の幼児教育の全体を理解できたとはいえないでしょう」と言う趣旨のことを言われた。その時は多少ムツとしたが、その後、何か肩の荷が降りたように

ホッとしたことを覚えている。しかし同時に、自分の仕事の有効性に対する無力さを益々痛感させられたのも事実である。

この想いは、幼稚園教育要領の作成にかかわって副座長（ワーキンググループの座長）の役割をお任せ付けられたときも変わらない。幼稚園教育要領の改訂により、「遊び中心の保育」の原則が踏襲されるとともに、教師の援助や環境構成の役割が強調された。しかし、こうした原理が保育の現場で本当に具体化されるのだろうか。教育要領やその解説書のレベルで先の教育原理は幼児の遊びを成立



させられるだろうか。問題は山積している。

このことは、保育者対象の講演会、現場の園内研究会でも状況は変わらない。もちろん、学級崩壊は幼児教育の自由保育、特に遊びを重視する保育に要因があるなどと言う大新聞のデマには、小学校の教育の実践の成果を無視し、要因を短絡させて結論を述べているので、芯から怒りを覚えるけれども、遊び中心の保育の充実こそ学級崩壊を防ぐ防波堤になりうるはずだという私の考え方を証明する保育が実際にそれほど多くないという事実も否定できないからである。

遊び中心の保育を実践する

大人の問題

多くの現場での「遊び保育」を見ると、長い間、悩んでいた現象にぶつかる。遊びは幼

児たちの自主的活動として、同時進行で展開する。しかも一般的に遊びは天気の良い日は外遊びと言うのが通念になっていることが多いので、子どもたちの姿は園庭の隅々まで広がる。こうなると、保育者にとって幼児たちの動きを把握することも、適時に援助することもおぼつかない。環境になじむことも、人間関係を築くことの経験も薄い幼児たちは、群を作ってもすぐ離合集散を繰り返し、環境への習熟も薄いので、幼児はじつくりと遊びに取り組むことは少ない。そのため保育者も援助のため忙しく動きまわることになる。こうなると、保育者の幼児理解は希薄になってしまふ。結果として幼児の遊びは「放牧状態」となってしまう。

一方、保育者は、我が国の伝統では子どもをしつかり見取ることより、かわることに

使命感があるので、子どもの一つの遊びにかかわったらそこから抜けるタイミングがとれず、かかりわりっぱなしの状態になることも少なくない。こうした保育者の態度は親であるがゆえにおせっかいを焼くという態度に近く、自分のかかわりが子どもの世界や子どもの自立にどう影響するかについての判断や反省に乏しい。しかも、このかかわりの意識に無自覚にとらわれてしまう態度が、子どもの世界から一步退りぞいて、子どもの遊びの状況を目で把握しようとする態度をいつの間にか放棄させてしまう。結果としては、幼児からの援助要請のあった場合のみ援助に向出口。口に出して要請できない幼児は放棄せざるを得ない。ここに、一部過保護、その他放任という事態が生じてくる。

こうした状況を見るにつけ、保育者も含め

て大人が子どもの遊びにかかわるとき、われわれ大人の根本的姿勢を問い直さざるを得ない。大人は子どもに遊びを教える人であってはならない。むしろ、一、遊びを暖かく見守る人であってほしい。二、子どもの遊びに加わるには遊び手として加わってほしい。本当に遊ぶ人であれば、遊びの楽しさは共有できないからだ。もしよき遊び手であるためには、大人自身がその遊びに集中して、楽しさを体現すべきである。こうしたメッセージを送りたくなる。とすれば、遊び中心の保育を産み出す道は、決して安易ではなく、我々大人が現代の市場原理が支配する社会の文化にどっぷりつかるのではなく、利益にも意味づけにもならない活動へ参加する充実感を再生すべきではないだろうか。

(日本女子大学)